

---

# 第1幕 第1章 バカと双子と若頭

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第1幕 第1章 バカと双子と若頭

### 【Nコード】

N9518U

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

第1幕の第1章開始です。

舞台は小説『バカとテストと召喚獣』です。オリジナル設定として生徒会と風紀委員会があり、顧問は両方とも鉄人こと西村先生が務めてます。

基本原作沿いでいく予定です。

## 第1問

(とりあえず、こんなもんでいいか)

黒髪の少年 氷室 護はシャーペンを置いた。

今は振り分け試験の途中である。護の解答用紙はまだ空白が多く残っており、普通ならばまだ必死に問題を解いているはずのだが、彼は何故か残りの問題を説くことを止め、机に突っ伏して眠った。

\*

護が解答を止めてから少し経った時だった。《ガタン》という大きな音がすぐ隣から聞こえた。流石に護も目を覚まし音のした方を見ていると、隣の席に座っていた少女が倒れており、それを馬鹿な少年が声を掛けながら抱き起こしていた。

「試験中です。席に戻りなさい」

そこへ、試験監督をしていた男性教師から耳を疑う様な言葉が飛んできた。

「何言ってるんですか！体調崩して倒れたんですよ！保健室に連れて行くべきです！」

「途中退席は無得点扱いになります。それでもいいですか？」

「待ってください。体調を治してから再試験を受けさせてあげてください！」

「駄目です。規則なので認められません」

「そんな…「明久」…え？」

男子生徒 吉井 明久と男性教師のやり取りを護が遮り、明久と教師の間に立った。そして、明久に何か耳打ちした。

「…！分かった、任せて！」

明久は護の話に頷くと少し下がった。護はそれを確認すると、

「さて、まずはくたばりやがれ！！」

そう叫びながら、男性教師のお腹に右ストレートを放ち、教師が小さく呻きながら屈んできた所を左アッパーで下顎を打ち抜き、素早く横にズレた。教師は上体を仰け反らせており、そこへ先程後ろに下がっていた明久が勢いを付けて迫っており、

「死に晒せ！！」

と叫びながら、強烈なタックルを決めた。教師は後ろにぶっ飛ばされ、床に倒れた。明久が更なる追い討ちを掛けようとした時、護が止めに入った。

「明久、取り敢えずここまでだ。後の処理は俺がやるから、お前はその娘を保健室に連れて行け」

「そうだね、分かった。…ありがとうね、護」

明久は護の言葉に頷くと、姫路を抱えて教室を出て行った。

## 第2問

「ゴホツゴホツ！…うん、参ったな」

ある部屋にて、護によく似ているが全体的に落ち着かせた感じの少年が、ベッドで目を覚ました。すると、近くに適度に冷めたお粥と風邪薬が置かれていた。少年は上体を起こし、お粥を食べると薬を飲んだ。

「ごちそうさま。それにしても、風邪が治ったら護にお仕置きしないとね」

《PRRRR PRRRR》

少年が咳きながら、もう一度寝入ろうとした時、彼の携帯に着信が入った。彼が携帯を取ってディスプレイを確認すると、護からの電話だった。彼は疑問を抱いた。何故ならこの時間は、まだ振り分けテストの途中のはずである。なのに電話を掛けて来れたのは緊急事態なのだろうと思い電話に出た。

「もしもし、どうし「真！氷室の権力ちからで先公一人辞めさせるが良いか？」…えーと、ちょっと落ち着け。話が見えん。何があつたか話せ」

寝ていた少年 真が出ると護は興奮した状態であり、とてもまともな話しが出来そうに無かった。

「とりあえず、一旦帰って来い。残りの振り分けテストも受ける気ないだろ？」

「ああ、確かにそうだ」

「なら、帰って来てからその話し、詳しく聞くからな。それで良いか？」

「分かった。それじゃ、すぐ帰るよ」

真と護はそれだけ確認すると電話を切った。しばらくすると護が帰って来て、テスト中にあった出来事、その件の処理の仕方について話し合っていた。

## 第1問 登校（真編）

文月学園に続く桜並木の坂道を、1人の女生徒が校舎に向かって歩いてきた。顔立ちは整っており、瞳は黒色で中に強い意志の光が宿っており、髪は黒のロングストレートを肩甲骨のあたりまで伸ばし、全体的に凛とした雰囲気を感じていた。

その彼女が向かう先、校門の所には1人の男性教師が立っていた。浅黒い肌と、鍛え上げた身体が特徴的な教師だ。

「西村先生、おはようございます。朝早くからお疲れ様です」

「ああ、おはよう。今日は朝会はないからもつとゆっくり来てよかったんだが」

「えっと、いつもの習慣でつい…」

男性教師　西村教諭の指摘に、女生徒は苦笑いを浮かべながら応えた。

西村教諭が言っていた朝会とは、生徒会と風紀委員会がその日の活動を前もって確認するための会議で、去年の後期から彼女も風紀委員会に入ったため参加していた。そのため、この時間での登校が基本となっていた。

「まあ、いいか。ほら、これがクラス分けだ」

「ありがとうございます」

西村教諭は女生徒の名前が書かれた封筒を彼女に渡した。女生徒は封筒を受け取ると懐から短刀を取り出し、慣れた手つきで封筒の封

を切り開いた。それを見た西村教諭は苦笑いしていた。そして、額に手をやりながら諦め気味に注意していた。

「言っても無駄だろうが、そんな物騒な物を学校に持って来るな」

「いつも言ってますが護身用です。本当は日本刀の方が好いのですがどね。それより、これはどういうことですか？」

女生徒は「問題ないだろ」という感じで反論した後、封筒から取り出した紙を西村教諭に突き付けた。そこには…

氷室 真 … Fクラス

追記 … 風紀委員長に任命する

と、書かれていた。

## 第2問

「クラス分けについての不満、苦情は聞かんぞ」

西村教諭は『Fクラス』に不満があると判断し、先手を打った。しかし、真は別のところに不満があった様で、首を横に振って否定した。

「別に、Fクラスになった事に不満は無いです。テスト当日に熱出して、学校休んだわけですから」

真はそこまで言うと、西村教諭に近付きながら持っていた紙を彼の顔面スレスレに突き付け、最後の一文を指差した。

「ただ、こっちの事には説明してほしいです。だいたい、3年の先輩方居られるのに、何故私なのか教えて下さい」

真が紙を下げると、そこにはかなりいい笑顔があった。ただし、何故か背筋が寒くなる程のプレッシャーが付いていた。

西村教諭はそれを軽く受け流しつつ、小さく溜め息をついた。

「大まかな理由は2つある。1つは、今の3年生の中にお前を超える者が居ないのだ」

「はっきり言いますね」

「事実だからな。実際、実力で後輩に圧倒される先輩もどうかと思うんだが…」

真が、はっきり言い切る西村教諭の様子に苦笑いしながら言うと、西村教諭は軽く額を押さえながら返した。

「それで、もう一つの理由は何ですか？」

「ああ、それは前風紀委員長が卒業する時、自分の後任にお前を推薦して行ったんだ。後、前生徒会長もな」

「まったく、あの人は……」

真はもう一つの理由を聞くと、大きく溜め息をついた。  
その時、一人の女生徒が登校して来た。

「おっはよう、マコちゃんにてっちゃん」

「おはようございます、朝比奈先輩。ただ、マコちゃんは恥ずかしいので止めてほしいのですが」

「おはよう、朝比奈。それと、何故俺の呼び名が『てっちゃん』なんだ？」

女生徒は2人に元気良く挨拶したが、2人に対する呼び名が不評だった様だ。西村教諭に関しては、こめかみをひくつかせていた。

### 第3問

「まあまあ、いいじゃない マコちゃんは今更だし、てっちゃんは名前が鉄人だからてっちゃんってことで」

「確かに私の方は今更ですし諦めてますけど、西村先生の『てっちゃん』は違うと思いますよ」

「ああ、そうだ。だから普通に呼べ」

朝比奈が2人の反応を気にしてない様子に、真は溜め息をつきながら話し、西村教諭もそれに頷いた。

「朝比奈先輩、『鉄人』は西村先生の渾名ですよ。だからこの場合、本名の『宗一郎』から取って『そうちゃん』にした方がいいですよ」

「あ、そうだね。ならこれからは『そうちゃん』と呼ぶね」

西村教諭は、自分をまともに呼ぼうとしない2人を見ると、また溜め息をついた。それから握り拳を作ると、

「だから、西村先生と呼べと言ってるだろうが！」

叫びながら、拳骨を2人の頭に落とそうとした。が、2人は慌てることなくそれを交わしつつその腕を掴み、勢いを殺さずに引き倒そうとした。西村教諭は一時体勢を崩したものの、足を一歩踏み出して倒れるのを阻止した。その後すぐに2人を叱ろうと振り向くが、彼女達は既に校舎に向かって駆け出していた。

「あつ！待て！話はまだ終わってないぞ！それに、朝比奈にはまだクラス分けを渡してないだろ」

「クラス分けならもう貰ってったよ」

「いつの間に…」

西村教諭はまだ話があるため、2人を呼び止めるが、朝比奈からは信じられない返事が返って来たため確認すると、彼女のクラス分けの封筒はなく彼女の手にあった。

「それと、あとは生徒会・風紀委員会の顔合わせが、今日の放課後にあると言つことですよね」

「ああ、そうなんだが…」

更に、真がもう一つ話の内容を確認すると正にその通りだったが、先程の事もあったため一応頷き、更に続けようとしたが朝比奈に遮られた。

「西村先生、私達はちゃんと分かっているから大丈夫だよ。…てな訳で、また後でね、そうちゃん」

「それでは、また後ほど」

「こら、待て！まだ話しが…。逃げられたか」

朝比奈と真は、西村教諭に別れの挨拶をすると、呼び止め彼を無視して校舎に入って行った。西村教諭はまだ仕事が残っていたので、

その場を動けずにそれを見送るしかなく、ここまでの彼女達の行動に大きく溜め息をついていた。

## 第4問

「あーあ、惜しかったな。あとちょっとで転ばせれたのに」

「転ばすつもりだったのですか？それなら足も払った方がよかったですよ」

朝比奈と真は廊下を歩きながら、西村教諭に仕掛けた悪戯について話していた。

「あ、そうだね。私としたことがうっかりしてたよ」

朝比奈が頭を掻きながら苦笑いを浮かべていると階段の所に着いた。そこで真はあることに気付いた。

「そういえば、朝比奈先輩。クラス分けまだ見てなかったですよ」

真は朝比奈に話し掛けながら、懐から短刀を出して彼女に渡した。

「あ、そっちも忘れてたよ。ありがとうね」

朝比奈も短刀を当たり前の様に受け取り、それを慣れた手付きで使い封筒を開けた。そして、短刀を返すと中から紙を取り出して読んだ。

「3年Cクラスだって。あと、生徒会長になってたよ」

「やっぱりですか」

真は、朝比奈が生徒会長になっていることを予測していた様で、実際になつていたことを聞くと頷いていた。

「それで、Cクラスってことは調子良かったのですか？」

「うん、かなりね。そういうマコちゃんは……」

朝比奈はそこまで言うとか何かを思い出したのか、苦笑いし始めた。

「そういえば、試験の日に熱出して休んでたよね」

「ええ、愚弟のおかげでね。それに先輩はお見舞いにも来てくれなかったですよ」

真は、その時の事を思い出すと、不機嫌になりながら見舞いにも来なかった人物を軽く睨んだ。

「あははー、ごめんね。あの頃、ちょっと忙しくなつてね。…と、私上だから、また後でね」

朝比奈が笑つてごまかしつつ謝ると、ちょうど別れる所まで上がつて来てたようで、逃げるように去って行った。

「…まったく、もう」

真は、自分が挨拶を返す間もなくさっさと行つてしまった先輩に対し軽く溜め息をつくとき、彼女も自分の教室に歩いて行った。

## 第5問 登校（衛編）

「こりゃ完全に遅刻だな」

衛は、家の門から出ると携帯を取り出して時間を確認し、どんなに焦っても間に合わない判断した。

「よし、歩いて行こう」

衛は少し悩んだ後、どうせ間に合わないならと、ゆっくり登校していくことにした。

「うわぁー、遅刻だー」

学園の近くまで来た時、先に見えるT字路の一方から親友のバカの声が聞こえてきた。衛はちょうどT字路に着くところだったのでよっと悪戯を仕掛けることにした。

「えっ！？うわっ！…イテテッ。だ、誰だ！今、足を引っかけたのは？」

バカは一瞬、T字路の角から足が出ていたのに気付いたものの遅かったようで、回避出来ずにまともに引っかかり勢い良く転んだ。ほんの少しの間うずくまっていたが、その後すぐに立ち上がり、T字路の角に隠れている人物に怒鳴りつけた。

「オッス、明久。朝から元気だな」

「あ、うん、おはよう。じゃなくて、いきなり何してくれるんだ！  
思いっきり転んじゃったじゃないか！」

衛は隠れてた角から出て行くと、何事もなかったかのように挨拶をした。明久もそれに釣られて挨拶を返すが、すぐに怒りを思い出して再び怒鳴りつけた。

「チツ、覚えてたか。…それだけ元気なら問題ないだろ。それより、せつかくだし一緒に行くか？」

「ちょっと、その舌打ち何！？だいたい、あれくらいじゃ誰も忘れないって。…って、一緒に行くかと言っというて先に行かないでよ」

衛は、わざと聞こえるように舌打ちすると「一緒に行こう」と言いながらさっさと先に行ってしまう、明久は文句を言いながらも衛の後を追って行った。

「そついえば、もう1年になるんだな」

2人で歩き始めてしばらくすると、衛がいきなりしみじみした感じ  
で言った。

「え、何が？」

「この学園に入ってお前らと出会ったのがだよ」

「ああ、そっか。いつも一緒に居たから忘れてたよ」

「確かにな。お前らと一緒に居ると何かと色々なことに巻き込まれ

てたけど、退屈はしなかったな」

2人は話しながら歩いて行き、学園前の桜並木の坂に着いた。

## 第6問

「げっ、鉄人。遅く来れば会わずにすむと思ってたが、まだ待ってたとはな」

「まじで!?!」

桜並木の坂道を進んで行き校門が見える所まで来ると、校門の所に西村教諭が立っているのが見えたため、衛は悪態をついた。

「まあ、ここでじっとしててもしょうがないし、さっさと行くか?」

「そうだね。普通に挨拶しながら素通りすれば見逃してくれるかもしれないし」

「じゃ、作戦開始!分かってると思うが、どちらか1人が捕まっても見捨てて行くこと」

「了解!」

衛と明久は同時に走り出した。そしてすぐに、西村教諭が居る校門に差しかった。

「おはようございます、鉄じ…じゃなくて西村先生」

「おっす、鉄人。朝からご苦労さん」

2人はすれ違い様に挨拶をし、そのまま走り抜け様とした。が、西村教諭の拳が振り上げられた。

「まったく、遅刻しておいて普通におはようございますじゃないだろ」

拳は脇を抜けようとしていた2人の頭目掛けて振り下ろされた。

「いった〜!？」

「っち、油断した」

明久はまともに拳を受けて頭を押さえながらうずくまり、衛は舌打ちしながら何とかギリギリで回避した。

「それと衛、いつも西村先生と呼べと言ってるだろ！」

西村教諭はそう言いながら衛に向かい拳を突き出した。衛はそれを見切って交わしつつ腕を掴み、自分の方へと引っ張りつつ西村教諭の鳩尾に肘打ちを入れようとした。しかし、その肘打ちが極まる前に、西村教諭の加減なしのもう1つの拳が衛の頭に炸裂したため、衛は攻撃を中止して明久と同様にうずくまった。

「いってー、また負けたか」

「お前は朝から何考えているんだ?…とりあえず遅刻なんだから、これを確認したらずくに教室に行け」

西村教諭は溜め息混じりに言うと2通の封筒を出し、2人に渡した。

「あ、どーもです」

明久は一応頭を下げながら封筒を受け取った。

「サンキュー。ま、確認するまでもないがな」

衛は気怠そうに言いながら封筒を左手で受け取った。その後彼が右腕を軽く振ると彼の右手の中に小型のナイフが飛び出して来た。

「……………」

その光景を西村教諭と明久は呆然と見ていたが、衛は気にすることなくそれで封筒を開けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9518u/>

---

第1幕 第1章 バカと双子と若頭

2011年10月11日07時57分発行